

## 自由応募分科会 5「キリスト教と中国政治」

### 報告 2

松谷暉介(日本キリスト教団筑紫教会牧師)

「北京守望教会の神学思想－特に教会論を中心に」

#### Theological thought of the Beijing Shouwang church- focusing on her Ecclesiology

現代中国において宗教問題は中国政府にとって解決困難な課題と言われる。特にプロテスタント・キリスト教(基督教、新教)は公認教会のみをカウントした政府統計(2010年)でも約2300万人、非公認教会を含めると5千万人とも8千万人とも言われており、中国政府はその急速な拡大を統制できずに苦慮している。従来、三自愛国教会が政府公認の教会として公共空間において合法的に活動するのに対し、家庭教会と呼ばれる非公認の教会群は秘密裏に活動する存在だったが2000年以降には特に大都市において新興の家庭教会が続出し、ソーシャル・メディアを活用したりオフィス・ビルを借りたりして公共空間において活動する「公開化」と呼ばれる動きまでが見られるようになった。

このような公開化路線を歩む家庭教会の中で急成長し注目を集めるようになったのが北京の「守望教会」だった。同教会は三自愛国教会には加入しない仕方で合法的な登記をする道を模索したが、この路線は政府当局との交渉の中でやがて行き詰まりを見せ、当局の同教会に対する圧力が増していった。そして2011年4月、礼拝をする集会所を失った同教会が屋外礼拝を強行した際、当局によって教会の指導者が自宅軟禁にされ、屋外礼拝に集まった信徒169名が一時拘束されるという事件が起こった。

この「守望教会事件」は中国の政教問題における重大事件として世界中で報道され、今日でも、政治学・社会学的な研究分析対象としてしばしば取り上げられる。しかし数多くある家庭教会の中で、なぜ守望教会が突出して公開化路線を先鋭化し、なぜ他の家庭教会が必ずしもそうでないか、という教会の「内部論理」、すなわち教会側の神学・思想が必ずしも明らかではない。そこで本発表では、守望教会の教会規則や主任牧師・金天明の説教集などの分析を通して、「守望教会事件」という政治問題における隠れた神学問題を明らかにする。